

# パーネルの「蛙と鼠の戦い」

海老澤 豊

## 序

18世紀の英国では古典作品を滑稽な筆致で模倣したバーレスクが多数生み出された。ここでいうバーレスクは、高遠な文体で卑近な主題を描くという「ずれ」から生じる滑稽さを狙った作品を指す。『イーリアス』や『アイネイス』の崇高かつ血なまぐさい英雄たちの戦闘場面に取材しながら、敵対者を小動物などの卑近な対象に置き換えた「戦闘詩」もそのひとつである。

遡ってみれば、王政復古期に活躍した詩人エドモンド・ウォラーは、バミューダ諸島を舞台にした3巻からなる「サマー諸島の戦い」(1645)で、入り江に流れ着いた母子の鯨と島民たちの戦いを描いた。人間たちは鯨の骨や油を得ようと攻撃を仕掛けるが、母鯨も尾のひと打ちで小船を破壊するなど、両者血みどろの戦闘が繰り広げられる。結局は「機械仕掛けの神」たるネプチューンの介入によって痛み分けに終わる。(1)

アディソンは『イーリアス』第3巻の冒頭でトロイヤ勢の進軍を語る比喻「冬の嵐と激しい雨を逃れた鶴の群れが、小人族(ピグマイオイ)に死の運命をもたらしつつ、啼き声も高らかにオケアノスの流れをさして飛び、朝のまだきに仮借なき戦いを仕掛けていく、その鶴の叫びが天空の下に響きわたるさまにも似ていた」をもとに、短詩「ピグミーと鶴の戦い」(1698)をラテン語で書いた。(2) この作品についてはニューコム(1719)、ウォーバートン(1724)、ビーティ(1762)、ジョンソン(年代不明)など複数の英訳がある。(3)

ウィンチルシー伯爵夫人アン・フィンチも、イソップ寓話を原典とする「鼠とイタチの戦い」

(1713)を、ラ・フォンテーヌからの翻案という形で残している。鼠とイタチが激しい戦闘を展開した後で、旗色の悪くなった鼠たちは巣穴に逃げ込むが、頭飾りをつけていた鼠の指揮官たちは穴を通ることができず、イタチに虐殺されるという話で、虚栄心を戒めるという寓意になっている。(4) だがプロイヒが指摘するように、この詩はあくまでも寓話の類であり、叙事詩のバーレスクとは言いがたい。(5)

## 1. 伝ホメロスの「蛙と鼠の戦い」

本論で取り上げるのは、ホメロスの作と伝えられてきた「蛙と鼠の戦い」である。この詩の作者に関して、プルタルコス「ヘロドトスの悪意について」の中で、ハリカルナッソスのピグレスと記している。(6) イヴリン＝ホワイトはピグレス説を踏襲した『スーダ辞典』には誤りがあると指摘しながらも、この詩が紀元前480年頃に書かれたとするスーダの推測には同意する。(7) だが真の作者は未詳のままである。イースタリングによれば、この詩はヘレニズム期の産物で、中世やルネサンス期には多くの手稿が作られ、教室で有益なテキストとして使用されたという。(8)

近年の批評家の意見を按ずれば、クルックシャンクはこの作品が「筆遣いの軽やかさとユーモア感覚」にあふれたパーネルの最良の作品であり、原典の疑似英雄詩的な「色合い」を再現することに不成功ではないと回りくどく結論する。(9) またボンドはこの詩について「人間の支配者や戦士たちを小動物に置き換えることは大きな成功であった。全体に高遠な文体が用いられており、ゼウ

スの介入はユーモラスな意図を持ってなされる」と評価する。(10) しかしイヴリン＝ホワイトはこの作品が「戦闘的な叙事詩のパロディであるが、真の諧謔的または文学的な価値はほとんどなく、おそらく例外は戦士たちが帯びる風変わりな武器のリストだけである」と手厳しい。(11)

この作品の英訳には、チャップマン(1624?), パーカー(1715), ウェズリー(1726), クーパー(1791)などがある。チャップマンは序において、ホメロスは「人間を軽蔑して、この害獣に関わる滑稽な詩を書き、英雄たちに劣ることのない高貴な生まれと勇ましい弁舌を彼らに与えた」と評する。(12) またパーカーは序文で、この詩が「整然とした機知、生き生きとした描写、均整のとれた脚色によって、『イーリアス』のいかなる箇所にも匹敵し、『オデュッセイア』のいかなる箇所にも卓越している」とまで言う。(13) さらにウェズリーは献辞で、この詩が「世界で最古にして最良のバーレスク」だと称賛する。(14)

最期にクーパーは『イーリアス』と『オデュッセイア』を全訳しているが、その巻末には「蛙と鼠の戦い」の訳も含まれている。クーパーは序文で「些細な主題を高遠な言葉で描くことは、バーレスクの実に正確な定義として役立つ。その例は『蛙と鼠の戦い』に見出せるが、『イーリアス』にはない」と述べている。(15) 英訳者が作品を弁護するのは当然とも言えるが、本論ではトマス・パーネル(1717)の英訳を選ぶ。

## 2. パーネル訳の特徴

トマス・パーネル(Thomas Parnell, 1679-1718)が英訳した「蛙と鼠の戦い」には、かなり長い序文、「ホメロスを鞭打つ者」として名高い古代の批評家「ゾイラスの生涯」および「ゾイラスの意見」が付されている。(16) つまりパーネルの英訳は韻文と散文が混じり合うメニッポス的な作品と考えることができる。(17) ゾイラスに関する散文が挿入されたのは、アレキサンダー・ポープの翻訳した『イーリアス』(1715-20)が批評家た

ちに酷評されたことに関係がある。パーネルは9歳年下の友人ポープを批判した、批評家ジョン・デニスらを「ホメロスを鞭打つ者」ゾイラスになぞらえて、逆に揶揄したのである。

パーネルは「序文」の冒頭で、『イーリアス』の英訳者ポープの肖像を「背が高く、思慮深い面立ちで、手を組み、目は据わり、顎鬚は伸ばし放題」と描き、これがコンスタンチノーブルにあるホメロス像と似ていると主張する。パーネルが「蛙と鼠の戦い」にゾイラス関連の散文を加えたのは、ポープをホメロスと同格に置き、ポープの英訳を批判した批評家たちを「ホメロスを鞭打つ者」ゾイラスに見立てて、彼らの批評がいかにも的外れであるかを明らかにするためである。

パーネルはポープの『イーリアス』に注釈のための材料を提供し、また序文として「ホメロスの生涯、作品、学識に関するエッセイ」を寄稿するなど、裏に表にポープの翻訳事業に貢献したとされる。(18) パーネルの死後にポープは、この序文があまりにも生硬なので、それを訂正するのにひどく手間がかかったと告白している。(19)

もっともポープは1714年のパーネル宛書簡で、「あなたは家柄の良い著述家だが、私はハックニーの三文文士。あなたはギリシア通で大学出だが、私は自学の貧しいイングランド人。あなたは聖職者だが、私は道化者」と自嘲気味に記している。またゲイ、ジャーヴァス、アーバスノットと連名で、ポープがパーネルに送った1716年の書簡では「あなたのゾイラス論に加えて、『蛙と鼠の戦い』と『ヴィーナスの夜番』はいずれも同種の物で傑作です」と讃える。さらに1717年のパーネル宛書簡でポープは「ゲイの劇は、他にも増して、他の著述家たちが提起した悪意と騒ぎの潮を食い止めるために多くの時間を費やし、ずっと苦しんでいます。奴らに対する最上の復讐は、今私の手元にあります、つまりあなたの『ゾイラス』は、本当に私が想像していた期待をはるかに上回っています。私はそれを印刷に回し、『蛙と鼠の戦い』の冒頭に置くつもりです」と述べている。(20) このゾイラス関連の散文が、パーネルの英訳を他

の訳とは異なる位置に据えていることは明らかだ。

パーネルは「エッセイ」において、ホメロスの真作と断定できるのは『イーリアス』と『オデュッセイア』だけであり、「蛙と鼠の戦い」の信憑性は「論議的となってきたが、多くの著述家によって認められている。なかでもスタティウスは、これをウェルギリウスの『ブヨ』（偽作）と同様に、より偉大な作品に取りかかる前の力試しと見なした。これは実に美しい戯作であり、偉大な詩人は寛いで楽しみながら書いたのかもしれない」と述べている。(21)

「蛙と鼠の戦い」の序文においても、パーネルはこれによく似た文言を繰り返した後で、この詩には『イーリアス』への言及が見られ、特に蛙や鼠の死ぬ場面は『イーリアス』における戦士たちの死に相応する例が見られると言う。一方でパーネルは原典とは異なり、作品を3巻に分割する自由を行使したと述べ、第1巻に「アルファ、口論の場面が見られる」第2巻に「ベータ、我々は評議会を見る」第3巻に「恐ろしいガンマは運命の成り行きを語る」という梗概を追加したと言うものの、実際には梗概は付されていない。なお前述のパーカー訳は3巻に分割しており、ウェズリーはスタンザ形式に訳している。

またパーネルは蛙や鼠の名前について、サイシグナサス、ライコファイナックス、クランボファガスなどのギリシア風の呼称を、それぞれブラフチーク（頬を膨らませる者）、リックディッシュ（皿を舐める者）、キャベッジイーター（キャベツを食らう者）などと英訳（これらはチャップマンが脚注で示した英名）してしまうと、詩の荘厳さが失われるとして、原典の名辞を用いるが、作品の前に名前の一覧表を英語で示したと語る。

しかしこの点について複数の批評家が批判してきた。ゴールドスミスは、戦闘員のギリシア風の名前は彼らの性質に滑稽なほめかしをもたらすが、英国の読者には何ら効力を持たず、これは修正することのできない欠点だと指摘する。(22) またミットフォードも、ユーモアを持って命名された戦闘員のギリシア風の名前を、パーネルが英

訳しなかったことで英詩として平板になったと惜しむ。(23) ちなみに他の英訳では、チャップマン、ウェズリー、クーパーがギリシア風の名辞を採用し、脚注でその英訳を示しているのに対して、パーカーとイヴリン＝ホワイトは蛙と鼠の名前を英語風書き改めている。

### 3. パーネルの「蛙と鼠の戦い」

作品に目を投じよう。第1巻は詩神たちへの祈願で始まり、「いかに威嚇する鼠たちが武人の美をまとって前進し、嗄れ声の者たちと恐ろしい戦闘を繰り広げたか」(1: 7-8)と主題を提示する。これが叙事詩の慣習に従ったものであることは言うまでもない。猫の爪から辛くも逃げのびた鼠の王子サイカルボックス（穀物倉を略奪する者）が、喉の渇きを癒そうと湖に髭を浸した時に、蛙の王サイシグナサス（頬を膨らませる者）は、鼠が友誼を結ぶに足る血筋の者であれば、宮殿の饗宴に招待しようと声をかける。

私は偉大なるサイシグナサス、ペレウスの一族で、  
美しいハイドロミードの抱擁から生まれ、  
岸辺を彩る婚礼の岸辺のほとりには、  
流れの速いエリダヌス川が喜んで滑走する。  
(1: 31-4)

蛙の要請に応じて鼠も自分の血統を誇る。自己紹介の際に父母や一族に言及するのはギリシア文学のならいである。

偉大なサイカルボックスの魂が私の内にある。  
勇敢なトロクサルタスの一族で、つやのある柔毛は  
愛をもって茶色のライコミルに圧縮されている。  
彼女が我が母で、その父ブテルノトラクタスが  
統べる、すべての野原で王女なのである。  
(1: 42-6)

かくして鼠の高貴な血筋と滔々たる弁舌を認めた蛙の王は、沼沢の宮廷に招こうと鼠を背に乗せ

て水面を泳ぎ始める。鼠の王子は恐怖に凍りつきながらも、エウロバも牛の背に乗って海を渡ったのだと自らに言い聞かせる。だがそこに水底から突如現れた「水中のヒュドラ」(110行)が、真赤な目をぎよろつかせ、水面をまっしぐらに進んできた。慌てふためいた蛙は、鼠を背に乗せていることも忘れて水中に潜る。蛙の背から振り落とされた鼠は沈みつつもがくが、重い湿気が毛深い上着の動きを妨げ、王子は瀕死の怒りを表明する。

陸地では汝の力は私の力に決して及ばないが、  
海で姦計によって勝ち誇るのは汝の力であった。  
だが天におおす神々は限なく探す目をお持ちだ、  
鼠らよ、鼠らよ、我が大いなる復讐者よ、立て。

(1: 127-30)

これを目撃していたライコファイナックス(皿を舐める者)が、鼠たちに事の次第を告げたことによって、鼠たちはみな悲嘆に暮れる。非業の死を遂げた王子サイカルパックスは仰向けに浮かんだままで、「親切な波が遺体を陸地まで運んでくれない」(146行)のであった。遺体が埋葬もされずに放っておかれるという件は、『イーリアス』のヘクトルを思わせないでもない。

第2巻では天上と地上の二つの評議会の様子が描かれる。鼠の王トロクサルタス(パンを食らう者)は地上の評議会で憤懣を語る。長男は猫の犠牲となり、次男は鼠取りにかかり、三男サイカルパックスは湖に引き込まれて死んだ。最愛の跡継ぎを失った王は蛙たちに復讐することを決意し、鼠たちは武装して戦の準備を始める。

インゲン豆からむしり取った緑色の莢で作った  
半長靴を履いて、戦士は大腿で野原を進軍した。  
胸に当てる胴鎧は鳥の羽できつく締め上げられ、  
猫からむしり取った略奪品で飾り立てられた。  
ランプの丸い鉢が彼らに大きな楯をもたらし、  
ドングリの大きな殻が頭を守る兜となり、  
あたり一帯に、光を反射しながら、  
背の高い針の森が投げ槍となってきた。

(2: 21-8)

使者の笏を持ったエンバシキュトルス(ポットに忍びこむ者)が蛙たちの前に進み出て宣戦を布告すると、蛙の王は「冒険好きな悪戯者が湖で命を落とすに過ぎない」(2: 50)と抗弁してみせるが、すぐさま蛙たちに応戦する準備をせよと命じる。

武装した英雄たちが選んだ軍服は緑色で、  
足にはゼニアオイの脛当をしっかりと着けた。  
両肩につけたビートの肩当もやはり緑色で、  
小さな丸楯にしたアブラナも緑色であった。  
水中に生息している様々な貝の殻で作った  
つやのある兜は戦場でびかびかと光り輝いた。  
先の細くなった葦の葉が磨き上げた槍となり、  
直立した隊形で周囲の大気を突き刺した。  
戦の身支度が整うと、定められた高さを取り、  
長い武器を構え、約束された戦を促した。

(2: 71-80)

鼠軍が陸の産物で武装するのに対して、蛙軍は水辺の産物で作られた武具に身を固める。いずれも長槍を構えるファランクス隊形を取っていることが推測できる。

一方で天上では神々が評議会を開いている。両軍の決戦が間近とみたジョーヴ(ゼウス)が、パラス(アテナ)に鼠軍に加担するかと問うと、鼠は献花を台無しにし、ランプから油を盗み、ヴェールを引き裂く、また蛙はうるさい鳴き声で睡眠を妨げたので、いずれにも助力を与えないと女神は答える。ギリシアの神々が地上の戦闘を監視して、英雄たちに目に見えぬ援助を加え、逆に彼らの闘争心を挫く手出しをすることは、『イーリアス』を読めば明らかである。

第3巻ではついに両軍が激突する。神々の加護を得られない鼠と蛙は次々と斃れていく。蛙のヒプシボアズ(声高に怒鳴る者)が、鼠のライキノール(舐める者)を投げ槍で殺すと、「鼠は轟音とともに倒れ、丸楯が音を立てた」(3: 14)。ま

た強靱な蛙のライムノカリス（湖を愛する者）が岩をつかみ上げて、鼠のトログロダイトス（穴に走り込む者）に激しく投げつけると、岩は見事に首に命中して、鼠の「臉の上には雲が永遠に宿ることになった」（3: 35）。一方で鼠のプテルノグリファス（ベーコンを挟む者）は、槍を持って蛙の hidroカリス（水を愛する者）を追いかけ、「彼の鼻からは脳漿が逆のように溢れ出た」（3: 68）。引用で示した部分は、いずれも『イーリアス』の戦闘場面を想起させる表現である。

だが鼠の偉丈夫メリダルボックス（パーネルでは分け前をぶんどる者、チャップマンでは肉きれを食らう者）が登場するや、蛙軍はたちまち劣勢に追い込まれる。

この戦士は、戦い合う群れから離れると、  
武器の恐ろしい栄誉を声高に自慢する。  
威張って歩き湖に近づくと、高揚した顔で、  
あらゆる蛙どもを迫り来る死で威嚇する。  
その力はものすごく、周囲の銀色の湖は、  
命の絶えた地面に大きな波を押し寄せた。  
(3: 125-30)

これを見たジョーヴはパラスとマルスに支援を要請するが、パラスの反駁にあって結局は自ら「赤い稲妻」（3: 156）を投じる羽目に陥る。雷撃は両軍を恐れおののかせるが、メリダルボックスの猛威は留まることを知らず、蛙軍の敗北は目前に迫った。ついにジョーヴは両軍の戦闘に終止符を打たんと蟹の軍勢を召喚する。

今や接合部が腰から垂れ下がるところで、  
蟹は切断する握力で英雄の尾を引き裂いた。  
手前では足を失って跳ぶ力を奪われ、  
彼方では手を失って戦場に横たわっていた。  
手からもぎ取られ、あたり一面に散らばって、  
折れた槍が積み重なって地面をふさいだ。  
無力なまま驚愕し、恐怖また恐怖に襲われ、  
鼠の軍勢に狂おしい混乱が生じたようだった。  
(3: 191-8)

頑丈な鎧をまとい鋭利な鋏を備えた蟹を前にして、鼠たちは尾を失い（一種の去勢とも読める）、一目散に逃げ出して地下の穴倉に身を潜める。かくして「戦闘の一切は（ジョーヴが定めた通り）太陽が一巡する間に、始まり、行われ、終わった」（3: 203-4）のであった。いわゆる「機械仕掛けの神」の介入によって、悲惨な殺戮は食い止められたことになる。

この作品を『イーリアス』の諷刺と考えるジュネットの見立てによれば、「無礼なトロイヤ人は蛙であり、復讐を求めるギリシア人たちはネズミで、アキレウスに相当するのがその一員のメリダルボックス」である。(24) すでに17世紀の批評家ボシュは、『叙事詩論』において蛙の英雄に着目し、「ホメロスはこの寓話の中で英雄たちの剛勇さを、メリダルボックスに賦与している。その勇壮さはジョーヴやあらゆる神々を驚嘆させた」と述べている。(25) またダークスは『イーリアス』でヘクトルとアキレウスが人間を超えた半神として描かれているように、「蛙と鼠の戦い」においても獣の英雄たちは人間の地位にまで高められている」と説く。(26) ジョーヴの雷撃にも耐えた英雄メリダルボックスが、蟹の装甲と鋏の前に敗れ去るという結末は、やはり高遠な文体で些細な主題を滑稽に描くという疑似英雄詩の性質に沿ったものと見るべきであろう。

#### 4. ゾイラスの生涯および意見

訳詩の前に置かれた「ゾイラスの生涯」で、パーネルはゾイラスのホメロス批判がいかに不当なものであるかを明らかにする。一例を挙げれば、ゾイラスは『イーリアス』第5巻の冒頭を腐す。パラス・アテナの加護によって、「ディオメデスの兜と鎧がきらびやかな炎に包まれていると、ホメロスが描いたのは実に馬鹿げている、なぜ彼はその炎で焼かれなかったのか」という具合である。また同じ第5巻の冒頭で、トロイア勢の兄弟ペゲウスとイダイオスがディオメデス目指して戦車

を駆るが、ペゲウスはディオメデスの投げ槍を受けて転げ落ちる。戦車から飛び降りたイダイオスは、兄の軀を守るでもなく、自ら模試を迎えようとしていた刹那、神のヘパイストスに救われるという一節がある。これについてゾイラスは「イダエウスが戦闘に巻き込まれた戦車を下り、そのために殺されそうになったのだが、彼を戦車から下ろした詩人は愚かである、彼は馬車に乗ったまま逃げてしまえばよかったのだ」と批判する。

パーネルは表面的にはゾイラスを悪しき批評家の代表としてあげつらうが、その実はポーブの英訳を批判したデニスらを揶揄しているのである。パーネルは「曖昧な学識、ある種無味乾燥な理解力をもって判断を下し、文彩にあふれた文体を理解できず、想像力の美しさにも感動しない者たち」や「生来の全般的な気難しさ、嫉妬による格別な目論みで、倦むことなく他人の評判に対抗する者たち」が文学の批評を歪めていると糾弾する。

ゾイラスの最期（火刑に処せられた）を描く段になって、パーネルはゾイラスが見た予兆を「別の国でひとりの詩人が立ち上がり、ホメロスを正当に評価し、自国民の間に将来にわたって彼を知らしめる」と描く。これがポーブを指していることは明らかであろう。

作品の最後に置かれた「ホメロスの蛙と鼠の戦いに関するゾイラスの意見」は、ゾイラスが「蛙と鼠の戦い」に注釈を加えたという趣向になっている。たとえば第1巻でサイカルボックスが、人間がいかに策を弄して隠しても、鼠は丸いパン、牡牛の胃、豊かなベーコン、チーズなどを探し当ててしまうのだと自慢する一節がある。ゾイラスはこれらの食品名が叙事詩の威厳を損なっていると指摘する。これはある意味でまっとうな意見かもしれない。しかしゾイラスは、鼠にとって食べることは最大の特徴であり、食物は最も喜びを与えるものであるから、別の表現をすれば不調和になってしまうと続け、物事には二面性があるので批評家は最悪のものを把握する義務があると主張する。このような文章によって、パーネルはゾイラスの批評が要領を得ないということを示そうと

している。

パーネルは「意見」の末尾で「大勢に攻撃される者は、敵どもが戦闘の槍を彼に向けた時に思い知ることになる英雄に似ている」とポーブを英雄にたとえ、「彼に攻撃の筆を向ける批評家は、成功を収められないので、名声を売ることはできず」、そのような批評家を書いた本は悪口を言っているということを読まれるだけで、やがては忘却の彼方に沈むであろうと締めくくる。

ゾイラスの生涯と意見には「蛙と鼠の戦い」と同様にバーレスク的な意図が認められる。詩人が英雄に比せられる一方で、彼にまとりわりつく下賤な批評家たちは滑稽味を帯びた文体で自らの愚かさを露呈してしまうという仕掛けである。この点においてパーネルの英訳は異色なのである。

## 注

- (1) Edmund Waller, "The Battle of Summer Islands," *The Works of Edmund Waller; Esq.* ed. Elijah Fenton (London: J. Tonson, 1730) 52-9.
- (2) Joseph Addison, "Plælium inter Pygmæos et Grues Commissum," *Examen Poeticum Duplex* (London, 1698) 158-65. 引用はホメロス『イリアス』松平千秋訳（岩波文庫, 1992）上巻 87頁.
- (3) Thomas Newcomb, William Warburton, James Beattieの英訳は*The Works of Joseph Addison*, ed. Richard Hurd, 6 vols (London: George Bell and Sons, 1902) 6: 558-76.に収録。また*The Poems of Samuel Johnson*, ed. David Nichol Smith & Edward L. McAdam (Oxford: Clarendon Press, 1974) 22-8.
- (4) Anne Finch, the Countess of Winchelsea, "The Battle of the Rats and the Weazles," *Miscellany Poems on Several Occasions. Written by a Lady* (London: John Barber, 1713) 283-4.
- (5) Ulrich Broich, *The Eighteenth-Century Mock-Heroic Poem*, trans. David Henry Wilson (Cambridge: Cambridge University Press, 1990) 61.
- (6) プルタルコス『モラリア10』伊藤照夫訳（京都大学学術出版会, 2013）188-9.

- (7) "Batrachomyomachia," *Hesiod, Homeric Hymns, Epic Cycle, Homeric*. trams. Hugh G. Evelyn-White (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1936) xli.
- (8) *The Cambridge History of Classical Literature: I Greek Literature*, eds. P. E. Easterling & B. M. W. Knox (Cambridge: Cambridge University Press, 1985) 39.
- (9) A. H. Cruickshank, "Thomas Parnell, or What was Wrong with the Eighteenth Century," *Essays and Studies* 7 (1921) 67,69
- (10) Richmond P. Bond, *English Burlesque Poetry 1700-1750* (Cambridge: Cambridge University Press, 1932) 177.
- (11) Evelyn-White, xli.
- (12) George Chapman, "The Occasion of this Imposed Crown," *The Works of George Chapman: Poems and Minor Translations* (London: Chatto and Windus, 1875) 271.
- (13) Samuel Parker, preface, *Homer in a Nutshell: or, his War between Frogs and Mice* (London: Thomas Newborough, 1715)
- (14) Samuel Wesley, dedication, "The Iliad in a Nutshell: or, Homer's Battle of the Frogs and Mice," *Poems on Several Occasions* (London, E. Say, 1736) 304.
- (15) *The Letters and Prose Writings of William Cowper*, eds. James King and Charles Ryskamp, 5 vols (Oxford: Clarendon Press, 1986) 5: 64. クーパーの訳詩は*The Life and Works of William Cowper*, ed. Robert Southey, 8 vols (London: Hnery G. Gohn, 1855) 8: 288-98.
- (16) *Collected Poems of Thomas Parnell*, eds. Claude Rawson & F. P. Lock (Newark: University of Delaware Press, 1989) 65-108. パーネルの「蛙と鼠の戦い」のテキストはこの版に拠る。なおギリシア語原典からの日本語訳(七五調)に、泉井久之助「蛙鼠戦役」『西洋古典論集』(創元社, 1949) 30-56. がある。
- (17) Thomas M. Woodman, *Thomas Parnell* (Boston, Twayne Publishers, 1985) 93-9.
- (18) Thomas Parnell, "An Essay on the Life, Writings, and Learning of Homer," in Alexander Pope, *The Iliad of Homer*, ed. Maynard Mack, 2vols (London: Methuen, 1967) 7: xviii.
- (19) Joseph Spence, *Observations, Anecdotes, and Characters of Books and Men*, ed. James M. Osborn, 2 vols (Oxford: Clarendon Press, 1966) 1: 84.
- (20) *The Correspondence of Alexander Pope*, ed. George Sherburn, 5vols (Oxford: Clarendon Press, 1956) 1: 226, 333, 395.
- (21) Parnell, "Essay," 52. スタティウスは「ブヨ」と「蛙と鼠の戦い」について「我らの著名な詩人が幾分軽やかな筆遣いで大作の前触れをなした」作品であると記している。Statius, *Silvae*, trans. D. R. Shackleton Bailey & Christopher A. Parrott (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 2015) 5.
- (22) Oliver Goldsmith, "The Life of Dr. Parnell," *Collected Works of Oliver Goldsmith*, ed. Arthur Friedman, 5vols (Oxford: Clarendon Press, 1966) 3: 425.
- (23) John Mitford, "The Life of Parnell," *The Poetical Works of Thomas Parnell* (London: Bell and Daldy, 1833) 55.
- (24) ジェラール・ジュネット『パランプセスト』和泉涼一訳(水声社, 1995) 214.
- (25) *Monsieur Bossu's Treatise of the Epick Poem*, trans. W. J. (London: Tho. Bennet, 1695) 44.
- (26) Richard J. Dircks, "Parnell's 'Batrachomoumachia' and the Homer translation Controversy," *Notes and Quires* 201 (1956) 341.